

集英社文庫

愛の素顔

落合恵子



集英社



集英社文庫

愛の素顔

昭和58年6月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 落合 恵子

発行者 堀内 末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋 2-5-10
〒101

電話 東京 (238) 2842 (編集)
(230) 6171 (販売)

印刷 大日本印刷株式会社

著者と了解のうえ検印を廃します。 (落丁本・乱丁本はおとりかえします)

© K. Ochiai 1983

Printed in Japan

ISBN4-08-750635-5 C0195

集英社文庫

愛 の 素 顔

落合恵子



集英社版

目次

オルガンの指紋	八
竹の子の皮	二
迷い猫	一五
ケーキの幸せ	一九
夜　桜	二三
紫陽花色 あじさい の	二七
駅弁 えきべん の蓋 ふた の裏	三一

夏の記憶	三四
午後の少年	三八
言葉が咲く	四二
五月のおむすび さつき	四七
六十六歳のブーツ	五〇
思い出と呼ぶには	五四
留守番電話と徒競争	五七
雑誌狂	六〇
プチホテルにて	六三
露地裏にて	七三
きれいな、キ	七七

右や左の男女さま……………	八〇
問題発言……………	八三
実に難しい問題ではありますが……………	八六
社会の受け皿……………	八九
女性特有の……………	九二
体験の欠如と欠如の体験……………	九五
敢て青っぽく……………	九八
胸に花つけ、どこへ行く……………	一〇二
いやな世の中……………	一〇四
噂の効用……………	一〇七
六十七年前の女性誌……………	一〇九

当世恋愛事情……………	一二五
あなた自身の生と性……………	一三七
草の根なくして花は咲かない……………	一五〇
イキイキおおらか人生……………	一五三
大人は子どもの教師になれない……………	一六六
ともに生きる……………	一七九
夏の終わりに……………	一八六
シンデレラ……………	一九九
どこかの星……………	二〇九
裸の王様……………	二一九

愛の素顔

オルガンの指紋

日差しが明るくなったせいだろう。光に透明感がましてきたせいもある。

春さき特有の強い風のせいかもしれない。

鏡の表面のくもりや、サイドボードのほこりが目について仕方がない。

午前中、せっせとカラ拭きしたのに、午後には、くもり始め、薄^うっすらとほこりをつけている。こんなことに気づくのは、仕事が一段落したり、予定通りすすんでいる時で、髪ふり乱して机にへばりついている時は、鏡のくもりもほこりも目に入らないのだから恥ずかしい。

また目に入っても、この仕事すすんでからと言いついてしまふ悪い癖がある。そんなところに、年下の女友だちが遊びに来た。

和子さんという。幼稚園の教師をしている。なんでも小学校三年生の時の作文に、「大きくなったら、幼稚園の先生になります」とすでに書いていたというから、根っから、その仕事があるっているのだろう。

五年前、就職が決まった時、

「とにかく一所懸命、多^い所懸命にやります。子どもといっしょに成長します」

白粉^{おしろい}つけのない頬^ほを紅潮させ、彼女はそう言ったものだった。

春の光の中で彼女の耳朶^{みみたぶ}のうぶ毛が、淡い金色に光っていたのも覚えているが、
「もう、まいっちゃった」

今日の彼女は、開口一番そう言うのと、小さく肩をすくめてみせた。

昨日のことだったという。

園児たちが、教室の片隅のオルガンをぐるりと取り囲んで、騒いでいたそうだ。

「これ、アタシの指だよ」

「こっちの、ボクのだ」

「それは、アタシの」

彼女が勤務する幼稚園の周囲には、畑もまだ沢山あり、風の強い日など窓を開けておくと、土ぼこりが入ってくるという。

それがオルガンの板について、その上から子どもたちが触るものだから、オルガンには、子どもたちの指紋がくつきりとしてしまう。

その指紋に気づいた子どもたちが、自分の指の跡を見つけて騒いでいたのだ。

彼女は、その光景を見て、胸を突かれたという。

「教師になりたての頃、私、日に何度もオルガンをキュッキュツと拭いたものよ。ひとつの指の跡も一粒のほこりも見逃すまいとして……。とにかく夢中だった。毎日が特別の日だった。でも、そのうち慣れてきちゃったのね。子どもに接するテクニクみたいなものも覚えてしまつて……。

自分でも、これじゃいけないと思いながら、つい忙しさにかまけて、気がついたら、こうなっていたの」

オルガンの背や側面に、ペタリとついた脂じみた指紋を見た時、彼女は、子どもたちに申しわけないと思ったという。

同時に、自分が情けなくなったともいう。

園児たちを送り出し、園じゅうの雑巾を動員して、オルガンや机や壁やガラスをキュッキュッと磨きながら、彼女は、就職したてのあの頃、はじめの一步に戻ろう、戻らなくてはと心の中で繰り返したそうだ。

「オルガンの指紋が気にならなくなった頃から、仕事もどこか、昨日の続きでやるようになってしまった」

そう彼女は述懐する。

「オルガンの指紋は、そのまま、私の心のくもりだったのかもしれない。子どもたちに教えられて、わかったわ。ねえ、キョウイクというのは、教えることではなく、共に育つて書くのかもしれないわね」

彼女は、しみじみと言った。

彼女が帰った後、私もせっせと部屋の掃除をし始めた。鏡を磨き、サイドボードをカラ拭きし、本棚を整理し……。

それにしても、三日坊主の自分を知りながら、年の初めにたてた計画は、どれもこれも守られ

ぬまま。

怠惰さもダメさ加減も丸ごとひっくるめて人間というもの、と言いつても、なにがなし自己嫌悪にとらわれる春の夕である。

竹の子の皮

人の味覚は、三歳前後で、すでに出来上がってしまうという話を読んだことがある。

確かに、幼い頃に馴れ親しんだ味は、いくつになっても忘れ難いものだ。

といっても私の場合は、四六時中、その味の記憶が、意識にあるといった感じでもない。普段はむしろ、休火山のように、意識下に眠っている。

ところが、ある日ある瞬間、突然、その休火山が活火山に化す。

照れ臭いような懐かしさといとおしさ、そして奇妙な切なさとかすぐったさをともなつて、幼い頃の味の記憶は甦よみがえってくる。

それは、舌そのものが覚えていいるというよりも、頭の中の、どこかとても深いところにある一点が記憶していて、なにかの拍子に、ふいに目覚め、心にゆさぶりをかける……。

そんな感じの思い出しかたであるようだ。

たとえば、日向ひなたで遊んでいる子どもの髪の毛の匂いを嗅いだ途端、カルメ焼きの味と、あの少し焦げたようなトロリとした匂いを思い出したり。真夏の昼下がり、ぼんやりと蟬の声など聞いていると、急に、割り箸ばしに沁しみついたアイスクャンデーのほのかな甘味が、甦よみがえったりする。南天の赤

い実を見た瞬間、風船ガムのニッキの味を思い出す、といった按配だ。

先日、取材で三日ほど、博多に行ってきた。旅に出ると、私は必ず地もとの市場をのぞく癖がある。

市場の（それも、夕暮れと夜とのちょうど狭間の時間の）、心が高ぶるような活気と、そのくせどことなく切ないような雰囲気^{せど}に惹かれるのだ。

取材最後の日、いつものように市場に出かけてみた。

八百屋の店先には、旬の筍^{たけのこ}が、ずらりと並んでいた。皆、今朝がた掘り起こしてきたばかり、といった様子の泥つきのものばかりだった。

平台に勢ぞろいした筍を見ているうち、思い出した味がある。

敗戦の年に生まれ、物資の乏しい時代に育った私にとって、子ども時代、筍の皮は、大事な“おやつ”であった。

筍の皮の柔らかかなところを一枚はがして水洗いし、産毛のようなものをとり、まんなか、紫蘇^そで漬けた梅干しを一個、置く。そして皮を二つに畳^{たた}んで、チューチュー吸うのだ。

はじめのうちは、ちよっとクセのある竹の皮の味しかない。

力一杯吸っているうちに、やがて皮を通して、梅干しの味が沁み出してくる。

酸っぱさと青くささ、そしてほのかな甘味がミックスされた不思議な味だった。

口中一杯に広がる、その不思議な味と、皮に沁みた梅干しのほんのりとした紅色は、私にとって、春の訪れを告げる“味”であり、“色”でもあったようだ。

気管支が弱く、風邪をひきやすかった私は、その「おやつ」を手にする頃、モコモコとした股^{もも}引きを脱いでもよしとの許可をもらうのである。

子どもながらも、心も軀^{からだ}もなにがなし、ものうい春の夕暮れ時。

縁側の端に座って、例のおやつをチューチューやりながら、勤めから帰る母を待って、そのまま、うたた寝をしてしまった……。そんな記憶も、かすかにある。

事情があり、我が家には父親はなく、母が勤めに出ていた。

そして、仕事から帰った母が、台所で夕食の仕度をする音を聴きながら、まだ頭の半分は夢の中で、それでも筍の皮をしっかと握りしめて、再びチューチューしゃぶった覚えもある。三十年も、昔のことではあるが。

博多から帰って、母にその話をすると、

「そういえば、そんな「おやつ」があったわねえ。あの頃、我が家は、筍に縁があったのよ、ヒジョーに。家の裏は、竹藪^{たけやぶ}だったし、第一、我が家は、まさに竹の子生活だったもの」

そう言って、ハハハと笑った。

苦勞話の嫌^{きら}いな母は、過去を語る時、冗談めかすか、茶化してしまふかのどちらかのようだ。

迷 い 猫

北風が、丸一日だけ臨時休業したような、暖かな午後だった。

サンダルをつっかけて、真冬のほの白い日差しの中、散歩にでてみた。

ポストのある角を左に折れると、五坪ほどの小さな花屋がある。

あれこれ迷った末に、白と薄い紫のストックを買うことにした。

顔馴染みになっている花屋のおかみさんは、

「少し古くなっちゃって、棄てようと思っていただけど、持ってくかい？」

と、バラを三本、おまけしてくれる。

どちらかというと、物に対する執着心は薄いほうだと思うのだが、こと花に関する限り、私は、かなり未練がましく、いじきたない。棄てるのがもったいないし、可哀想な気がしてならないのだ。

花びんの中かの切り花にしても、枯れかけて、そろそろ棄てる時期がきても、あと一日、もう一日と棄ておしみてしまう。

なかなか、思い切れないのである。